

香取遺産

Vol.109

天覧の獅子

関生涯学習課

☎(50)1224

へ太鼓の糸をきりりとしめて
ささらをさらりと

多田の獅子舞



▶左から中獅子、雌獅子、雄獅子



◀雌獅子隠しの一場面

風流の獅子舞とされる三匹獅子舞で、唯一、市の無形民俗文化財に指定されているのが多田の獅子舞です。字堀之内にある妙見神社の1月の例祭と4月の春祈禱（おびしゃ）などと呼ばれ、春先の豊作祈願の祭事）に行われてきました。

多田の獅子舞は、雄二匹と雌一匹が一組となって上演されるもので、これにササラを持った道化役の猿や露払いの笹持ちと弓持ちがつきまします。獅子方は分立して、笛、小太鼓、大太鼓のほかには太鼓が入ります。獅子の腹には太鼓が括られています。実際に叩くことはありません。

三匹獅子舞と呼ばれる民俗芸能は、一人で一匹の獅子役を担当し、三匹一組で舞うものです。舞の始まりや終わりなどに関連した小歌を伴い、雄獅子に隠された雌獅子を、もう一匹の雄獅子が探すという「雌獅子隠し」と呼ばれる

演出を含んでいるのが特徴とされています。

多田の獅子舞は「さんざり」を演奏したのち、「道笛」「四方舞」「おかざき舞」「乱舞」の構成で舞われていきます。「雌獅子隠し」の演出は「乱舞」の中にあります。舞の終わりに「太鼓の糸をきりりとしめてささらをさらりと」と小歌の断片が唄われ、「さんざり」の最後のフレーズを演奏して締めくくります。

明治、大正、昭和と三度にわたり天覧に供した多田の獅子舞は、風流の獅子舞の流れを残しつつ、儀式曲としての「さんざり」と大小の鼓を取り入れるなど、佐原獅子にも通底する音楽要素を含んでいることから、当地域の民俗芸能史を考える上で、とても重要な芸能といえるでしょう。昭和47年6月29日、市の無形民俗文化財に指定されました。